

開設科目の概要

No.	開設科目名	科目の概要
1	宗教科教育法22-1	<p>「宗教科教育法22-1」では、カトリック・ミッションスクールの「宗教」の授業において必要な知識と技法などを学び、適切な授業を行うことができる実践力を養うことを目的とする。今年度は学習指導要領の改訂に伴う学習観の変化とデジタル社会に応答する宗教の授業のあり方について模索する。講義に加えてマインドフルネスを用いた祈り、グループワーク、模擬授業なども行う予定である。参加者全員で宗教の授業について、対話を通して共に宗教の授業を考える探求の場としたい。</p> <p>1日目：カリキュラムと評価。コンピテンシーと評価から単元を設計する。実践事例をいくつか取り上げながら、観点別の評価を踏まえたカリキュラムデザインを考える。</p> <p>2日目：授業の構成について、導入とまとめを考える。聖書について①聖書をどのように生徒に伝えるか。</p> <p>3日目：聖書について②聖書を用いた授業の実践事例。</p> <p>4日目：教材の活用とアクティブラーニング。PBL型授業、哲学対話、ICT活用授業。</p> <p>5日目：グループで授業作成と相互検討会。</p>
2	破局と希望	<p>倫理の基本テーマとして「よく生きる」や「幸福に生きること」があげられます。実際、多くの人は、さまざまな意味で、よく生きよう、幸福に生きようと考え、それぞれにおいて最善と思われる選択を試みます。でも、本当にそうであれば、この世界は、そうした、それぞれの最善の選択が積み重なった結果として、とてもよい、幸福な世界になりそうです。しかし、今を生きるわたしたちの実感としてはどうでしょうか。人間が明るい未来を求めて「最善の選択」をすればするほど「破局」が近づいてくるような悲劇的予感に迫られるかもしれません。そのようなときにこそ、本当の意味で「希望」とは何か、みなさんといっしょに考えたいとおもいます。</p>
3	教会論 I	<p>この「教会論 I」では、「神の国」の実現を目指したイエスの生き方に見られる教会意識の萌芽を探り、12使徒による初代教会の活動やパウロの教会理解を経て古代・中世へと深まる教会理解の歴史の変遷を順次検討してゆくことにする。つまり、「神の国」とキリストの教会の出発および教会論の諸モデルを系統立てて考察する。</p> <p>その際に、教父たちの神理解や共同体的実践を土台にして信仰伝承の深みを参究してゆくことにする。つまり「教父学」と「教会論」とを総合化する方向性に歩み出しつつもキリスト者の共同体的礼拝実践の現代的意義を再発見してゆくことにしたい。</p>
4	キリスト者の召命：人と神の出会いと交わり	<p>本講座では、すべての人間に与えられている「召命」について考察します。特に、キリスト教の霊性に基づき、呼びかける神と応答する人間のダイナミックな出会いと交わりを宗教的人間論の観点から掘り下げていきます。また、召命を生きたキリスト者たちの生き方を紹介します。各々の生きる固有の召命を今一度振り返る機会になると思います。受講生による活発なディスカッションを期待します。</p>
5	宗教科教育法22-2	<p>「回心」の概念の聖書的な意味を確認しながら、現代神学、発達心理学、道徳性・宗教的発達理論を参考にして、生徒のintegralな発達、成長に関わる宗教教育の理論と方法を学ぶ。さらに、聖パウロ、聖アウグスチヌス、聖イグナチオ、内村鑑三などの回心体験を参考にしながら、「私の回心体験」と生き方を振り返ることができるようにする。さらに、宗教科の授業を工夫するためだけではなく、学校そのものが「愛と自由」に満ちた雰囲気の中で、「共同識別」によって重要な事柄を決定するための前提を学ぶ。そのために、「回心教育のダイナミズム」を学び、教育現場に適応する術を学ぶ。</p>
6	典礼による パストラルケア	<p>パストラルケアは神の恵みの機会です。奉仕者は世話される側の方々と出会うことによって、神の愛を実践する立場に置かれています。このように、パストラルケアは生きている典礼として言えるでしょう。従って、司牧者は自分の奉仕活動を典礼に根を下ろす必要があります。典礼に参加することによって、司牧者は奉仕するための力を得ると同時に、神との一致の中に奉仕者としての務めを果たせるようになります。本講義は基本的に二つの問いかけを持っています。第一に、どんな神学的理解の上にパストラルケアは典礼に土台を築くことができるでしょうか？第二に、どんな神学的営みによって典礼がパストラルケアにおいて具現化することができるのでしょうか？</p>
7	マルコ福音書を読む	<p>マルコ福音書は四福音書の中で最も古い起源を有するとされており、他の福音書を読む上での基礎、土台となるものである。本講座ではマルコ福音書の成立やその特徴、全体構造を概観し、福音書の冒頭から結末に至るまでの主要な記事の解釈を幅広く、司牧者としての視点で紹介していく。キリスト教にとって、神学、霊性、教義、典礼、法制などのあらゆる信仰生活の基礎は、まさに聖書、中でもキリストのことばに立脚しており、またそうであり続けなければならない。そのため本講義が、受講者にとって聖書に親しみ、理解を深めるきっかけとなり、ひいては教会生活や学校教育の現場で益するものとなるよう努めたい。</p> <p>参考書：M. ヒーラー著、田中昇・湯浅俊治共訳『カトリック聖書注解 マルコによる福音書』（2014年、サンパウロ）</p>

8	グレゴリオ聖歌の靈性に学ぶ	キリスト教は人間を霊と魂と身体からなる存在と理解し、靈性・理性・感性がそれぞれのあり方に対応すると考えてきました（金子晴勇『キリスト教靈性思想史』参照）。今回わたしたちが取り上げるグレゴリオ聖歌は、古くから歌い継がれ、今なお修道院などの典礼で歌われている生きた宗教音楽です。それが「生きた」宗教音楽であるのは、ひとえに、典礼という、神と親しく交わる場で、人間が霊と魂と身体とをはたらかせ、いわば全人的に賛美の声を上げ、この音楽は本質的に求めているからではないでしょうか。この講座では、宗教史、わけても靈性史の観点からグレゴリオ聖歌を取り上げ、聖歌歌唱のうちに継承された中世の信仰世界に近づいてみたいと思います。
9	パウロの神学	キリスト教は、紀元1世紀末、ローマ帝国が支配した東地中海地域で成立しました。パウロは、このキリスト教成立に決定的な役割を果たした宣教者です。新約聖書は全27文書。パウロ本人が書いた文書（手紙7通）とパウロの名前で書かれた文書（手紙6通）を合わせると計13文書。全文書数の約半数を占める事実は、彼の影響力の大きさを表しています。パウロはファリサイ派のユダヤ人聖書学者でしたが、非ユダヤ人（異邦人）にキリストの福音を伝え、非ユダヤ人とユダヤ人の「共生の場」（教会）をつくり、維持することに命を懸けました。彼の宣教に対する情熱は、何に由来するのでしょうか。本講義ではパウロの宣教活動の土台にある神学思想について学びます。
10	聖歌に学ぶ降誕祭の靈性	キリスト教の典礼暦は、待降節に始まる「降誕祭圏」と四旬節に始まる「復活祭圏」の二つの大きな季節が、「年間」の期間をはさみながら一年を巡ります。誕生と永生と日々の生活。典礼暦は、神とわたしたちの、まさに「いのちの暦」といえましょう。この講義では、降誕祭の成り立ちや、降誕祭の神学にも触れた上で、この祭日のためにつくられ歌われてきたグレゴリオ聖歌と古今の賛美歌に学び、その靈性を一緒に読み解いてまいりたいと思います。ここに言う靈性を、わたしたちのうちに息吹く霊の促しと捉えるならば、これらの降誕祭聖歌は、わたしたちに何を告げ、何を促していると考えられるでしょうか。
11	キリスト教教理史2	本講義ではキリスト教神学における聖霊論の歴史について取り扱う。聖書における聖霊についての記述、古代、中世、近世、近代、現代のキリスト教神学において、聖霊論がどのように展開したのかを歴史的観点から考察する。
12	宗教科教育法22-3	大きな変化の只中にある現代世界の中で、「宗教科」の教育をどのように考え、また展開することができるのでしょうか。このクラスではカトリック系のミッションスクールにおける「宗教科」の教育を含む宗教教育活動全般を広義の「回心」へと関連付けられるものとして捉え、以下の三つの問いへの応答しつつ、「宗教科」の教育をめぐって理論と実践の両面からの接近を試みたいと思います。第一に、私たちが生きる近代以降の「世俗化」が進む社会において「宗教科」の教育をどのように位置づけることができるのでしょうか。第二に、2000年にわたるキリスト教の歴史と伝統の中で「教育」はどのように位置づけられ、変容してきたのでしょうか。第三に、以上のような現代性と歴史的伝統との間で、現場における宗教科の教育はどのように実践することができるのでしょうか。以上の問題意識を共有しながら、現代のそしてこれからの宗教科教育について受講者とともに考えたいと思います。